

「『シヤック・ザ・ナイトメア』の件だと？ あんなに嫌がってたつてのに、どう言う風の吹き回しだ？」

不信感を顔中にまぶして、クラウス・レストレードはアーサーたちをねめつけた。

スコットランド・ヤード。ロンドン警視庁本部の通称だ。

元々はウエストミンスターの一地区にある二階建ての四角い建物だったが、ロンドンの人口が増え、犯罪数が増加するに従って、周囲の建物も庁舎として使用されるようになっていく。

アーサーとコナンは、その中の一室を訪れていた。

いや、正確には、その一室の外の廊下だ。中に入った途端、クラウスに追い出されたのである。とはいえ、部外者が勝手に入室したのだから、極めて真つ当な対応ではあるだろう。

すでに日も傾き、窓からは赤く染まった夕空が見える。建物に入るときには、点灯夫が通りのガス灯に火を付け始めていた。

間もなく夜だ。殺人鬼が徘徊する時間である。

「ちよつとした依頼があつたんでね。一番新しい事件のことで、幾つか教えて欲しいことがある」

アーサーははずけずけと言った。親しげというよりは馴れ馴れしい、もつと言えば凶々しい態度だ。

案の定クラウスは渋面で、

「またにしる。いまは忙しい」

「なに、気を遣わずとも結構だ。聞きたいことだけ聞けば、すぐに退散するさ」

「あんな。その時間がないって言ってるんだ」

「妙だな。昼間から酒場パブに入り浸る時間はあるというのにー」

「昼間の話じゃなくて、いま、時間がないんだよ！ ……第一、なんで酒場パブに寄つたことを」

「いちいち解説するまでもない推理だが、簡潔に言えば、酒臭い」

アーサーがしれつと言うと、クラウスはいよいよ顔をしかめつつ、着ている服のおいを嗅いだ。もつとも、コナンもまるでわからなかったので、八割方は鎌を掛けたのだと思われる。

何しろ、暇があれば酒場に入り浸っているような不良警官なので、当てずっぽうでも当たる確率は高いのだ。

クラウスはスコットランド・ヤードの警部だった。

ひよろりとした長身の、ややくたびれた感のある男である。歳もコナンやアーサーよりだい

ぶ上で、三十前後だったはずだ。

年上の警部に対していぶんと失礼な物腰だが、生憎アーサーは誰に対しても似たような態度だ。対して、クラウスが曲がりなりにもまともにアーサーの相手をしているのは——その理由のひとつは——彼がアーサーに少なからぬ「借り」があるためだった。《名探偵コラム》に書かれた「あること」の多くは、クラウスの手柄になっているのである。

もつとも、本人は別段喜んでるわけではなく、むしろ煙たがっている。気持ちはよくわかった。歳のわりに出世できたからとはいえ、背負い込んだ苦勞を思えば割に合わないのだろう。

ちなみに、弟は養子に出たらしく、そちらは姓をウォリックと言うらしい。

「とにかく、いまは立て込んでるんだ。お前等の相手をしてる暇はない」

「ふむ。さっきの部屋で取り調べている件かね？ 《ジャック・ザ・ナイトメア》より重大な事件でも？」

「その通り。ひったくりの常習犯を締め上げてる最中でな。被害者の証言があるし目撃者もいるんだが、肝心のブツが出てこない」

「どこかに隠したってことかな？」

「悲鳴を聞いて巡回中だった捜査がすぐに駆けつけてる。家やアジトに戻る余裕はなかったはずだ。当然、ひったくってから捕まるまでの道すがらは搜索したが、見つからなかった。そもそも隠せるような場所なんかないんだ。かといって、その場に他の仲間がいた形跡もないし……」

「取られた物は？」

アーサーの質問に、クラウスは渋い顔をする。

「……銀食器だとき」

横で聞いていたコナンも、思わず耳を疑った。

「銀食器？ ひったくりですか？」

「ああそうだ。俺だって、嘘だろって思ったけどな。なんでも、修繕に出していた物を、店から回収して屋敷に戻る途中だったそうさ。バスケットに入れてた一式を、丸ごと持って行かれたらしい。で、ここからが面倒なところなんだが、犯人はそのバスケットは持ってやがったんだ。ところが、中身が空でな。銀食器だけどこかにやったか、あるいは何かに入れ替えたか……」

「し、しかし、いずれにせよ銀食器が一式となると、相当嵩張るはずさ。それが見つからないというのは……」

「だから、犯人の方も開き直ってやがるのさ。自分は、捨てられてたバスケットを拾っただけだ、ってな。常習犯がヌケヌケと」

クラウスはぼやくように言って、苛立たしそうに髪を搔く。コナンもどんな顔をすれば良いかわからず、困惑しながらアーサーに目を向けた。

アーサーは肩を竦める。

「さつき入ったときちらつと見たけど、奥に座ってた彼が犯人？」

「……正確にはまだ容疑者だがな」

「で、反対側で喚いてた老人が被害者か」

「そうだ。……まあ、正確には彼は使用人だから、直接の被害者は銀食器の所有者である彼の雇い主ってことになるが……」

「ふむ。ではその、店と、屋敷と、犯行現場と、逮捕された場所とを、正確に教えてくれ」

「だから、いまお前の相手をしてる暇はー」

「その『暇』を作ってあげよう。なに。すぐに済む」

平然と言うアーサーを、クラウスは苦い顔でにらみつける。

だが、やがて観念した様子でため息を吐いた。そして、請われた通り、銀食器を回収した店、使用人の勤める屋敷、ひったくりのあった場所と、容疑者が逮捕された場所とを伝えた。

アーサーはクラウスから情報をひと通り聞くと、目を閉じ、人差し指を唇に当てて、「うんうん」と頷いた。それから、いきなりドアを開け、さつき追い出された部屋に入り直した。

クラウスが「おいっ!？」と慌てて跡を追い、驚きながらコナンも続く。

部屋には机が置かれ、手前に職員が一人、奥にコナンたちと同年代に見える、二十歳そこそこの柄の悪い男が座らされていた。一方、ドアの横の壁際には、やはり制服姿の警官が一人と、初老の男が立っていた。古びてはいるが整った身なりは、確かに執事風だ。

机の上には蓋に取っ手の付いた籐製の籠が置かれている。小振りのトランクケースほどもある大きさだ。蓋は開けられており、中身は空。これが問題のバスケットだろう。

「はあ？ またお前か？ なんだよ、さつきから!」

男が呆れたように怒鳴った。老人も目を白黒させている。職員と警官は顔見知りで、クラウスの表情を見ると事情を察した様子で口を閉ざした。

一方アーサーは部屋の中央に立つと、じろじろと男を見定め、さらに振り返って壁際の老人を眺めた。

唐突に、

「ご老人。銀食器の入ったバスケットを、こちらの男性に奪われたと聞きましたが？」

「え？ あ、ええっ。そうです！ この男に間違いありません!」

「そのときの状況を詳しく説明して頂けますか？」

「は、はい。と言っても、あつという間の出来事で。私は主人の命令で、修繕に出していた銀

食器一式を店で受け取り、屋敷に戻る途中でした。それが、リージェント街に出てすぐに突然後ろからぶつかられ、手に提げていたバスケットを引つ張られて……もちろん、抵抗したのですよ？ 奪われまいと！ ですが、何しろ突然のことでしたし、結局は力尽くで……それでも、この男の顔は見忘れたりはしません。私からバスケットを盗んでいったのは、間違いなくこの男です！」

老人は鼻息も荒く訴えた。対して、犯人と決めつけられた男は、余裕の面持ちで「ハッ」と嘲った。

「だーから、俺は知らねえって言ってんだろ？ やけに立派な籠が落ちてたもんだから、気になって拾っただけだ。それにしたって、ちよろまかそうとしたわけじゃないぜ？ まあ、いきなりそこの警官が追いかけて来たもんだから、とっさに逃げちまったけどよ？ 本当は、ちゃあんと市警ヤードに届けるつもりだったんだ」

「よ、よ、よくも白々しく！ 聞けば、これまでに何度も、似たような真似を繰り返しているそうではないか！」

「だから今回も俺の仕業だって？ だったら肝心の銀食器とやらはどこにあるんだ？ 俺が食っちゃまったとでも言うつもりか？」

老人は顔を赤くして唾を飛ばしたが、男はいかにもわざとらしく両手を広げて肩を竦めた。

コナンは眉をひそめる。なるほど、確かにこの男は怪しい。というより、クラウスの言う通り、開き直っている。どうせお前等は証拠を出せまいと、高を括っているかのようだ。

「アーサー。これは……」

コナンは苦々しく口を開けたが、サッとアーサーが片手を挙げて遮った。

そして、

「今回の事件は彼の単独犯ではないし、そもそも単純なひったくりでもない」

「な、なに？」

「どういこうとだ、アーサー？」

クラウスとコナンが立て続けに聞き返した。

しかし、アーサーは答えず、男の前に歩み寄って冷たく笑った。「哀れな男だ」

「あんっ？」

「この犯行は、君だけのものではないが……とつくに裏切られていることに、まだ気付かないのかね？」

「なー」

アーサーをにらみつけていた男が、突然目を泳がせた。

その反応をつぶさに見届けた上で、アーサーがニンマリと笑う。

こちらに背中を向けたまま、

「時に、ご老人。貴方は住み込みかな？ それとも通い？」

「え？」

またしても唐突に投げかけられた問いに、老人がぼかんとする。

クラウスが「……おい」と声をかけると、職員が慌てて手元の聞き取り記録を確認した。

「ええと、住まいはブリクストンロード、ローリントン・ガーデン三番とすることでしたから、住み込みではなく通いでしょう」

「家と通りの間には、水はけの悪い、小さな庭？」

「さ、さあ？ さすがにそこまでは……」

職員は当惑して答えたが、コナンがハッと顔を向けると、老人がぎよつとしたのがわかった。

アーサーの指摘通りだったらしい。

「ふむ。まあいいや。ーレストレード警部。そのご老人の住まいを搜索してみたまえ。バスケットの中身が見つかるはずだよ」

「なっ!?!」

「お、お待ちください！ いったい、何を!?!」

男と老人が同時に叫んだ。コナンも思わず叫びたいぐらいだった。

しかし、アーサーはあくまで平然としたまま、

「忽然と消えた銀食器？ ふんっ。その男が、僕が開発したような超強火力発熱装置でも持っているなら、銀を溶かして側溝に流すぐらいのことは出来たかもしれないけどね。まあ、警部の話を聞く限り、銀食器一式をどこかにやる余裕はなかったはずだ。少なくとも、バスケットを強奪した『あと』では。なら、銀食器が消えたのは強奪する『前』さ。」

とすると、そちらの老人も共犯に違いない。というより、彼の方が主犯だ。わざわざひったくりに見せかけたのは、盗まれたって証言だけでは自分が疑われると思っただらう。それで、常習犯である、そちらの彼に声をかけたんだ。たとえ彼が疑われたとしても、銀食器が出てこなければ逮捕されることはない。一方、自分あくまで『被害者』として、疑惑の目を逃れられる」

「じゃ、じゃあこの二人は……!?!」

「要するに、狂言だよ。破棄せず修繕に出すような銀食器が一式丸々となると、売ればそれなりの値が付くはずだ。それに目が眩んで、ひと芝居打ったってことさ」

コナンは啞然と目を丸くする。クラウスや、彼の部下たちもだ。逆に、男と老人は真っ青になって唇を戦慄かせていた。二人の顔色がアーサーの説の正しさを物語っている。

コナンは脱帽して首を振り、

「言われてみれば、確かに筋は通るが……どうしてわかったんだ？」

「どうして？ 初歩的なことだよ、コナン」

「アーサーが少しだけ得意そうな表情を浮かべた。

「不可能な事を消去して考えるんだ。だいたい銀食器が消えたという他にも、おかしな点は多々ある。

たとえば、さつき聞いた店と屋敷の間は、普通に歩けば一時間はかかる。銀食器一式となれば嵩張るだけでかなりの重量だろうに、その特別屈強とも見えないご老人は馬車を拾おうともしていない。人通りが多く、目撃者には困らないだろうリージェント街に出るまでね。

ぶつかられた、抵抗したというわりに、二人とも服装の乱れはなし。バスケットを取り合ったはずの手にも、怪我をした様子はない。

それに、二人の靴。どちらも似たような泥が付いているが、最後に雨が降ったのは一昨日の夜から昨日の明け方だ。リージェント街はもちろん、屋敷から店までの経路、この男が捕まった地点まで含めて、二人が通りそうな道はすべて舗装されているから、路面はとつくに乾いている。いまだにそんな泥が付くとすれば……」

「……さつき確認してた、この人の住まいの『水はけの悪い庭』か……」

コナンが尋ねると、アーサーは「イエス」と頷いた。

「まあ、重いしね？ 銀食器を運ぶときも、二人して手分けしたんだろう。

駄目押しは『裏切り』の件かな。当たりは付いたんで揺さぶってみれば、案の定、彼の視線がとっさにご老人に向けられた。さもありません。共犯者と言っても元々のつき合いがあったわけでもなし、しかも、より大きなリスクを負うのは彼の方だ。それで、浮き足だって墓穴を掘ってしまった」

そう言うと、まるでそれきり興味をなくしたかのように、アーサーは男に背を向けてクラウドの前に移動した。

長身のクラウドに向かって、満面の笑みを突きつける。

「さて、警部。家宅捜査は部下に任せて大丈夫でしょうか？ 本来の要件に戻るとしよう！」

\*

事件の被害者クロエ・ノートンの住まいは、セント・ジョンズ・ウッド、サー・ペンタイン通りにあった。優雅な住宅街の一角にある、アパートの一階だ。

「独身の若い女性にしては、またずいぶんと良いところに住んでたんだな」

「何しろ『あの』アイリーン嬢のご友人だ。『普通の』独身の若い女性とは思わない方がいいか

もな」

コナンの感想にそう返しながら、アーサーはクラウスから借りてきた鍵を使い、部屋に入った。

すでに日は落ちている。主なき部屋はカーテンも閉ざされ、暗かった。アーサーはドアをいっばいに開き、街灯の明かりで室内の様子を伺う。側にあつたサイドボードにランプが載っているのを見つけ、手に取った。

懐から自慢の電気式ライターを取り出し、バチツと火花を飛ばしてランプの芯に火を付ける。そして、ランプを掲げながら奥に進むと、ぶ厚いカーテンを開けて外の明かりを取り込んだ。

部屋は広く、そして物が多かった。独り暮らしとは思えないほどだ。ベーカー街222Bとは違う種類の「渾沌」が横たわっている。コナンは顔をしかめた。

「まいったな。この中から手紙を探さなきゃならないのか。これは大仕事だぞ」

「大変だな。頑張ってくれ」

「他人事みたいに言うな！ 捜し物なら、お前の方が得意だろ！」

「それより、見る、コナン。ソファアとテーブル、それにそっちの椅子は、全部フランス製だ。キャビネットも凝った造りだし、小さいがピアノまである。ほお、食器はエインズレイか。それにロイヤルウースター。ロイヤルクラウンダービーも。独身の若い女性だが、金には困ってなかったと見えるね」

「詳しくはないが、高そうなのはわかるよ。第一、数が多い！ どう考えても一人分じゃないだろ」

「鋭いね。特に、椅子と食器の数。つまり、ここには度々『客』が訪れていた可能性が高いってことだ」

「さらりと言うと、「寝室はこっちな」とアーサーは部屋の奥に向かった。相棒の持つ明かりを追って、コナンも続く。

正直、女性の寝室をのぞくには抵抗があつたのだが、そんなものは部屋を見た瞬間に消し飛んだ。リビングの比ではない。中央のカーペットの上こそ何も置かれていないが、そのスペースを取り囲むかのように、物が溢れかえっていた。リビングより狭いので、かえって圧縮されている印象があつた。

「これはまた凄い服の数だな。ワードローブからはみ出してるじゃないか」

アーサーも呆れたように言った。

「どうやらクロエ・ノートンは、「節制」とは無縁だったらしい。「整頓」とも。それに衣装のデザインを見る限り「慎み」ともだ。」

「そしてまた、極めつけに豪華なベッドだ。隣の鏡台も負けてはいないが……お、これは宝石

ドレッサー

箱だな。どれどれ」

ドレツサー  
鏡台には、見事な装飾が施された脚つきの箱が置かれていた。アーサーは蓋を開けようとするが、開かない。鍵付きらしい。アーサーは顔をしかめた。

「このサイズの宝石箱に鍵？ 非効率的な。箱ごと持ち去られたら一緒だろうに。第一、この程度の強度なら、ハンマー一本で中身を出せる。こんな鍵、単に気分の問題だろう」

「……いや、箱ごと持ち出したりハンマーで壊すことを躊躇わない輩までは想定してないだけだと思うぞ？ というより、なぜそこで不機嫌になるんだ」

「洒落臭い。気分だけの鍵など、手持ちの簡易工具だけで……」

「待て待て！ 警部に借りた、この鍵。小さい鍵が一緒にあった。多分この宝石箱の——」

「開いた」

「……早すぎないか？」

「慣れてるからな」

「慣れてるのか……そうか……」

それ以上詳しくは聞かないことにして、コナンは口を閉ざした。

アーサーは妙に楽しげに、鍵の開いた蓋を開ける。しかし中を見ると、「おや……」と静かに両目を細くした。

気になってコナンものぞき込んだ。宝石箱の中には、煌びやかな宝石に彩られた指輪やネックレス、ペンダントなどが収められていたが……。

「……思ったより少ないな……と言うより、左半分が妙に空いてないか？」

「……殺害されたときに身に付けていた……にしては、足りない数が多いか」

「偶然？」

「かもしれないし、違うかもしれない」

「よく中身だけ消える日だ」

「銀食器ほどのインパクトはないがね」

そう言いながら、アーサーは工具をしまうと、替わりに片目だけのオペラグラスのような物を取り出した。機械弄りで細かな部品を扱う際に使用している小型のアイルーペだ。

右目に当て、装飾品を幾つか取り上げて、宝石が本物かどうかを確認する。だが、特に問題はなかったらしい。アイルーペを外して装飾品を戻すと、「ふむ……」と右手の人差し指を唇に当てた。

じつと宝石箱を見つめる。

それから、ふと、

「……ここもか？」



宝石箱は四隅に脚が付いている。その隙間に手を入れ、宝石箱の底に指を掛けた。すると、底がスライドして前に出て来た。わかりにくいのが、箱の底が薄い引き出しになっていたのだ。中は、空だ。

「なんだ、二重底になったのか？ 隠し金庫みたいだな」

「……この引き出し……」

「どうした？ 何か気になるのか？」

「いや……手紙を隠すには、ちょうど良いなと思ってね」

「っ！ 言われてみれば……」

「まあ、さすがに断定はできないがね」

アーサーはアイループを右目に当て直し、ぬっと顔を近づけた。

「……引き出しの横に擦った跡。使用はしていたらしいな。しかし、中身は空。ほんの微かにインクのおい。とすると、やはり……」

ぶつぶつとつぶやいたあと、アーサーは部屋の中央に向き直った。

改めて、ランプを高く掲げ、混然とした寝室を見渡す。火屋<sup>ほや</sup>越しの柔らかな光が、視界を薄く照らしながら、ゆらゆらと揺れ動いた。

どれぐらいそうしていただろうか。特に何も見つけられなかったのか、アーサーは無言のままランプを降ろした。

しかし、

「ん？」

「どうした？」

「……このカーペットは、まだ新しい。それに……他の家具に比べると、これだけ妙にありきたりというか……」

「そうか？ 特に変わったところは……そりゃ確かに、リビングに敷いてあったのに比べれば平凡かもしれないが」

コナンは足下を見ながら言った。しかし、アーサーは返事をせず、じっとカーペットを見つめる。

「……コナン。どいてくれ」

「うわ!？」

言うが早いのか、アーサーが突然しゃがみ、床のカーペットをつかんで引っ張った。コナンは危うく転びそうになりながら、慌てて床に移動した。

「おい、アーサー！ いきなりなんだ？」

「ちゃんと声はかけた」

「かけただけだろ」返事ぐらい待て——つて……アーサー「これ！ この染みは！」

「……君の専門分野だな、コナン。今度はインパクトもばっちりだ」

アーサーがしゃがみ込んだままランプをかざして床を照らす。

カーペットに隠されていた床に、黒い染みが広がっていた。コナンも素早く覗き込み、しっかりと染みを凝視した。

確信はない。

が、おそらくこれは、血痕だ。

「……………」

真剣な面持ちで床の染みをにらんでいたアーサーが、「やれやれ」と腰を上げる。

「銀食器のからくりを暴いたのが裏目に出たな。あのまま放っておけば、警部はいままだ市警で頭を抱えていただろうに」

「アーサー……これはまさか、被害者の……し、しかし、犯行現場は、プリムローズ・ヒルだつたはずじゃ」

青ざめるコナンに、アーサーは皮肉っぽい微笑で応じる。

「この時間に警部を探すとすると、まずは馴染みの酒場かな？ 問題は、あの男の馴染みがウエストミンスターだけで十軒はあるってことだが……仕方がない。探し出して酔いを覚ましてやろう」

\*